

# 東洋文庫所蔵本に押捺された蔵書印について（十八）

## ―植物学者の蔵書印―

中善寺 慎

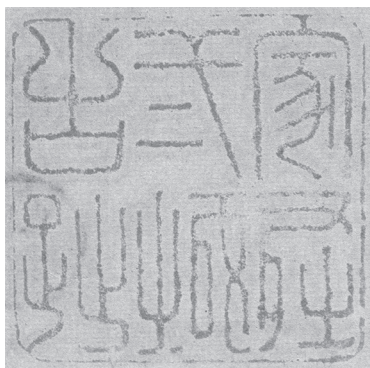
### 既刊連載目次

- 一 朝鮮本に押捺された朝鮮の蔵書家の蔵書印 書報三五号
- 二 僧侶・寺院の蔵書印、附神官・神社の蔵書印（上） 書報三六号
- 三 僧侶・寺院の蔵書印、附神官・神社の蔵書印（下） 書報三七号
- 四 国学者の蔵書印（上） 書報三八号
- 五 国学者の蔵書印（下） 書報三九号
- 六 漢学者・漢詩人の蔵書印 書報四〇号
- 七 学校・教育機関の蔵書印 書報四一号
- 八 医家・本草家の蔵書印 書報四二号

- 九 大名・藩主とその家の蔵書印 書報四三号
- 十 幕臣・藩士の蔵書印 書報四四号
- 十一 戯作者・操觚者・新聞社の蔵書印 書報四五号
- 十二 商賈・実業家・企業の蔵書印 書報四六号
- 十三 近代の学者・教授の蔵書印 書報四七号
- 十四 図書館・博物館とその周辺の蔵書印 書報四八号
- 十五 政治家・官僚の蔵書印 書報四九号
- 十六 欧米人の蔵書印 書報五〇号
- 十七 歌人・俳人・詩人の蔵書印 書報五一号

## 凡 例

- ・ 印影は縮尺任意の単色写真である。
- ・ 印文の縦の寸法をミリメートルの数字で掲げた。
- ・ 複数の資料に該当蔵書印を見い出せるものは、印影を採集した資料名に\*印を付した。
- ・ 資料名につづけて、請求記号を丸括弧に包んで付した。
- ・ 蔵書家の伝記などは主として次の資料に依った。
  - 市古貞次「ほか」編『国書人名辞典』
  - 井上宗雄「ほか」編『日本古典籍書誌学辞典』
  - 国立国会図書館編『人と蔵書と蔵書印』
  - 平凡社編『日本人名大事典』
  - 日外アソシエーツ株式会社編『近現代起業家人名事典』
- ・ 配列は、印記所有者のよみの五十音順とした。



飯沼慾齋（一七八二—一八六五）

江戸時代後期の蘭方医、本草学者。天明二年（一七八二）伊勢国亀山藩の御用商人西村信左衛門の次男として生まれる。幼名本平、のち専吾。名は守之、のち長順。字は龍夫。号は慾齋。桐亭を屋号とした。若くして学問に志し寛政六年（一七九四）大垣に出奔、漢方医飯沼長顕方に身を寄せ、のちにその養子となり医業を嗣ぐ。小野蘭山、水谷豊文に本草学を、江馬蘭齋、宇田川榛齋に蘭学を学び、蘭方医を開業。天保三年（一八三二）義弟健介に家督を譲り隠居、大垣西郊の長松村に平林荘を構えて植物学の研究に専念した。著書『草木図説』はリンネの分類法による日本最初の植物図譜である。慶応元年（一八六五）没。美濃国大垣の縁覚寺に葬られる。掲出印は二印とも蔵版印として捺されたものである。

「家在二城古趾」（48）

『草木図説 前篇（草部）』（Ⅳ—三—B—b—一二七）  
「俟後賢識者訂正」（48）

『草木図説 前篇（草部）』（Ⅳ—三—B—b—一二七）



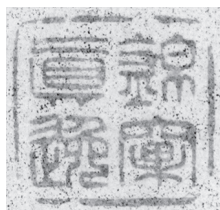
池野成一郎（一八六六一—一九四三）

明治・大正・昭和前期の植物学者、遺伝学者。慶応二年（一八六六）江戸駿河台の旗本の家に生れる。東京開成学校、大  
学予備門を経て、帝国大学理科植物学科に進学し、明治  
二十三年（一八九〇）卒業。翌年に帝国大学農科大学助教授。  
ソテツの精子を発見し系統学に貢献する。明治三十九年ドイ  
ツ・フランスに留学し、帰国後の明治四十二年に教授となる。  
日本の植物形態学の先駆者。理学博士。昭和十八年（一九四  
三）東京西巢鴨の病院に没す。著書に『植物系統学』『実驗  
遺伝学』など。  
名古屋大学理学図書室の池野文庫に旧蔵洋書三五〇余冊が  
ある。

掲出書は藤井尚久旧蔵書。

「池野成一郎蔵」(30)

『和漢洋対訳本草辞典』（VII—三—B—一—五四）



伊藤圭介(一八〇三—一九〇一)

幕末・明治期の博物学者。名は舜民、のち清民。幼名は左仲。字は戴堯、のち圭介。号は錦巢、太古山樵、華繞書屋、十二花楼。享和三年(一八〇三)尾張国名古屋呉服町の医者西山女道の次男に生まれる。のち父の実家を継ぎ伊藤姓を名乗る。幼時より博物を好み、本草を水谷豊文に、蘭学を藤林泰助・吉雄常三・野村立栄に学ぶ。文政十年(一八二七)長崎に遊学、シーボルトに師事し植物学を修める。シーボルトより譲り受けたトゥンベリ『日本植物誌』を基礎に『泰西本草名疏』を著わす。名古屋藩医となり種痘の普及にも努め、嘗百社を束ね洋学館を主宰した。文久元年(一八六一)蕃書調所に出仕し、翌年物産局教授となる。維新後は東京大学理科大学員外教授に迎えられ、明治十四年(一八八一)に教授に進む。明治二十一年には日本最初の理学博士。少壮時より漢詩を嗜み書画を能くした。明治三十四年(一九〇一)急性腸カタルにより東京本郷区の自宅で急逝。谷中の天王寺墓地に葬る。著書『小石川植物園草木図説』など。明治期の植物学、物産学の研究と発展に貢献した。旧蔵の本草学関係書は国立国会図書館と名古屋大学附属図書館、名古屋市東山植物園、杏雨書屋などに収蔵される。

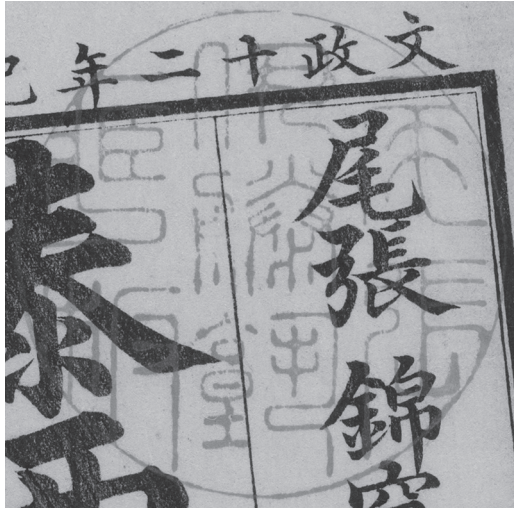
「華繞書屋」二種と「尾張伊藤塾蔵板」は、いずれも封面に捺された蔵版印である。

「華繞書屋(円印)」(37)

「泰西本草名疏」(XV三B一b四〇)

「華繞書屋(方印)」(22) 『医療雑纂』(XV五一—一六四)

「錦巢真逸」(27) 『衆鳥図』(四F一四)



「尾張伊藤塾藏板」(67)

『泰西本草名疏』(W-三-B-b-四〇)

「明治十三年七八翁伊藤圭介書画記」(38)

『衆鳥図』(四-F-四)



伊藤篤太郎（一八六五—一九四一）

明治・大正・昭和前期の植物学者。慶応元年（一八六五）伊藤圭介の五女小春と、婿に入った圭介門弟中野延吉との嫡男として名古屋に生まれる。明治五年（一八七二）上京して圭介より教えを受ける。明治十七年イギリスに渡り、ケンブリッジ大学で植物学を専攻。帰朝後は植物生理学の必要を説いたが、圭介の後継者として博物誌的研究に終始した。愛知県尋常中学校、東京の立教中学などで教鞭を執り、明治二十八年鹿児島高等学校造士館教授。明治三十三年理学博士。大正十年（一九二一）東北帝国大学理学部生物学科の開設に際し講師に迎えられる。昭和三年の退官まで植物分類学を講じた。昭和十六年（一九四一）東京で没す。著書に『大日本植物図彙』『琉球植物図録』等がある。

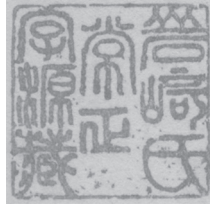
国立国会図書館の伊藤文庫は、圭介が蒐集し篤太郎が襲蔵した本草関係書を、昭和十九年（一九四四）に帝国図書館が購入したもの。そのほかの旧蔵書は、篤太郎の没後すぐに伊藤家を離れ、昭和十七年に売立てがあった。

掲出書は藤井尚久旧蔵書である。

「伊藤篤太郎」（15）

『日本科学之大恩人瑞典国チユンベリー氏  
記念展覧会出品目録』（VII—110）





岩崎灌園（一七八六―一八四二）

江戸時代後期の本草家、幕臣。天明六年（一七八六）江戸下谷三枚橋の岩崎儀左衛門の男に生まれる。名は常正、万。字は土方。号は灌園、又玄堂、東溪。通称は源蔵、源三。幼少より植物を好み、医学館で本草を講じる。晩年の小野蘭山に師事。江戸参府のシーボルトとも親交があった。文化六年（一八〇九）御徒見習いとして出仕。文政五年（一八二二）家督を継ぐ。主著の『本草図譜』は、飯沼慾斎の『草木図説』と並び本格的な植物図譜と称せられる。他に『武江産物誌』などがある。また屋代弘賢の『古今要覧稿』を分担執筆した。天保十三年（一八四二）谷中の家に没す。墓は江戸浅草永見寺。旧蔵書は明治になって四散したという。

「宇宙式本草崎必究」（39）

『本草図譜』（三―J―a―ろ―四一）

「岩崎氏常正字源蔵」（27）

『魚譜』（三―J―a―ろ―五九）

「灌園」（20）

『魚譜』（三―J―a―ろ―五九）



白井光太郎（一八六三—一九三二）

明治・大正・昭和前期の植物学者。文久三年（一八六三）越前国福井藩士白井幾太郎の嫡男として江戸藩邸内で生れる。東京英語学校に学び、明治十九年（一八八六）帝国大学理科大学植物学科を卒業。東京農林学校を経て、東京帝国大学農科大学助教授、ついで教授となる。理学博士。明治三十二年ドイツに留学し植物病理学を移入した。本草学の研究にも造詣が深く、森林植物学の開拓者とも看做されるなど幅広い関連分野に業績を残す。昭和七年（一九三二）漢方の配剤を誤り急死したという。著書に『植物病理学』『日本博物学年表』がある。収集の本草学関係書は昭和十五年に帝国図書館の購入するところとなり、白井文庫として国立国会図書館に現存する。

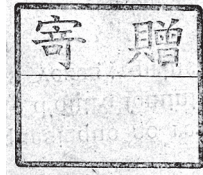
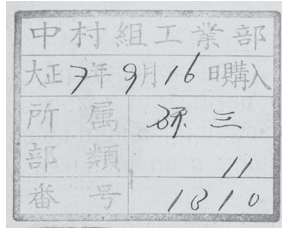
掲出書はいずれも岩崎久弥旧蔵書である。

「白井光」(31)

『宝物及書籍目録』(IV-四-D-四三)

「白井氏蔵書」(24)

『蘭山十品考叢筵小牘』(三-J-a-r-四八)



### 中村試験所

大正時代の民間研究施設。第一次大戦の海運景気で莫大な利益を得た新興富豪中村組の社長中村精七郎（一八七二—一九四八）が資金二五〇万円を拠出し、大正六年（一九一七）から建設が始められた。当初は医薬・化学・水産の三部組織の構想であったが、最終的には、京橋区出雲町の工業研究所（主任安藤源之助）、荏原郡大井町の医薬研究所（主任柴田長道）、平塚村の農芸植物研究所（主任松村任三）、蒲田町の化学研究所（主任加藤与五郎）および水産研究所（主任星野佐紀）の五部門が設置されることとなる。医薬研究所には病院の附設も計画され、出資金の総額は二千万円ともいわれた。しかし大戦の終結にともなう景気後退により中村組が財政難に陥ったことから研究所構想は縮小を余儀なくされ、名称も中村工業所、中村組工業部と変遷、間もなく研究所の資産一切を売却してしまふ。化学研究所跡地が松竹映画に買収され蒲田撮影所となるのは大正九年（一九二〇）のことであった。この間に蔵書は四散した。

東洋文庫は大正八年に中村試験所旧蔵書を手入した。蔵書印等から約四〇件が確認できている。この時の顛末は石田幹之助「東洋文庫の生れるまで」に詳しい。

なお、掲出の「寄贈」印の印中には、山県勇三郎の名を記入したものがあつた。ブラジルで活躍した実業家の山県勇三郎（一八六〇—一九二四）は、中村精七郎の兄である。

番 號	No 春外 286-2		
著 者			
書 名			
購入年月日	大正	年	月 日
所 屬			部
中村試驗所			

「寄贈」(24)

『Elementos de botanica geral e medica』

(I-11-C-11)

「中村組工業部大正年月日購入所屬部類番号」(30)

\* 『Elementos de botanica geral e medica』

(I-11-C-11)

『台湾樹木誌』(XV-11-B-b-75)

「番号No.著者書名購入年月日大正年月日所屬部中村試驗所」

(44)

『Schrift- und Buchwesen in alter und neuer Zeit. II.』

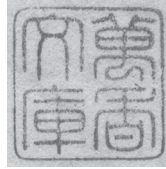
(I-1-A-11)

\* 『The genus rosa』(I-Fe-a-11)

『Flora Java』(I-Fe-b-6)

『Prodromus florae ae nepalensis...』(O-11-C-14)

『日本菌類目録』(XV-11-B-b-74)ほか

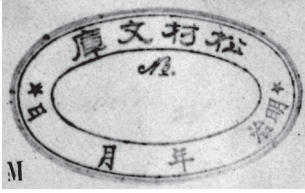
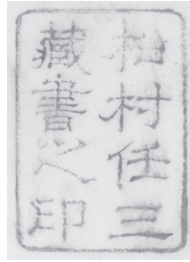


前田利保（一八〇〇—一八五九）

幕末期の外様大名。越中富山藩第十代藩主。寛政十二年（一八〇〇）富山藩主前田利謙の次男として江戸藩邸に生まれる。本姓は菅原。松平氏。幼名は啓太郎。名は利保。字は伯衡。号は益斎・恋花亭・自知春館・自知館・在樹・万香・弁物舎・清薫。出雲守・長門守を称した。文化八年（一八一—）兄利幹の養嗣子となり天保六年（一八三五）家督相続。在任中は藩政を刷新、物産方を設けるなど国産振興を図った。江戸と富山に薬草園を作り、種痘術を奨励。早くから学問を好み和歌を嗜み、海野幸典に歌学・国学を、岩崎灌園に本草学を、宇田川榕庵に蘭学を学ぶ。楮鞭会を主宰した。弘化三年（一八四六）六男の利友に家督を譲って隠居。安政六年（一八五九）没。従三位を贈られる。墓は富山市長岡の前田家廟所。著書『本草通串』『本草通串証図』など。掲出書は、栗本丹洲『千虫譜』の写本である。

『万香文庫』（22）

『虫豸図譜』（三—J—あ—ろ—七五）



松村任三(一八五六—一九二八)

明治・大正時代の植物学者。安政三年(一八五六)常陸国多賀郡下手綱村に松岡藩士松村儀夫の長男として生れる。幼名は辰次郎。号は観照。藩の貢進生として大学南校に入学し英学を修め、明治六年(一八七三)には開成学校に転じ法学を学ぶ。明治十年東京大学小石川植物園に奉職。明治十六年に東京大学理科大学生物学科助教となる。明治十九年からドイツに留学。明治二十三年には教授に進み、また、理学博士となる。日本の植物の調査分類に努め、植物採集と研究のため各地に出張し、東京大学の腊葉室の基礎を築いた。大正十一年(一九二二)退官し、名誉教授。昭和三年(一九二八)東京で没し、郷里の赤坂墓地に葬られる。著書は『日本植物名彙』など。

掲出書のうち、洋書の二件は大正八年購入のもの。『花壇地錦抄』と『桜華八十図』は岩崎久弥旧蔵書である。

「松村 MATSUMURA JINZO」印は蔵書印ではなく、自著の奥付に捺された著者検印を採録した。

「松村 MATSUMURA JINZO」(22)

『日光山植物目録』(XV-3-B-b-71)\* ほか  
「松村任三蔵書之印」(34)

「Enumeratio plantarum in Japonia sponte crescentium」  
(XVII-5-C-a-4)

「松村文庫明治年月日No」(25)  
「Enumeratio plantarum in Japonia sponte crescentium」  
(XVII-5-C-a-4)

『Prolusio florae japonicae』(La-1-30)

\* 『花壇地錦抄』(XV-3-B-b-53)  
『桜華八十図』(XV-3-B-b-55)